

国語科「古典A」授業実践紹介

授業者：長谷川 喜代美

学 年： 2年

単元名：古文『大鏡』『雲林院の菩提講』『弓争ひ』『道長の豪胆』

単元のねらい（7つのチカラ：①自分を理解する力、③考える力、⑤コミュニケーション力

- ① 道長がどのような人物かを読み取ることができる。
- ② パフォーマンス課題に取り組むことができる。

単元の構成とパフォーマンス課題

～『大鏡』の内容を踏まえ、なぜ道長が関白になれたか、後輩に説明することができる。～

- ① 「雲林院の菩提講」を読んで『大鏡』がどのような作品か理解する。
- ② 「道長の豪胆」「弓争ひ」を学習し、内容を把握する。



- ③ 道長や伊周達がどのような人物として描かれているかを比較する。
- ④ i P a dを使い道長がどんな人物かを調べ、理由を考える。
- ⑤ 班でそれぞれの意見を共有することができる。
- ⑥ パフォーマンス課題に取り組むことができる。

パフォーマンス課題

～『大鏡』の内容を踏まえ、なぜ道長が関白になれたか、後輩に説明することができる。～

- ① 『大鏡』『弓争ひ』『道長の豪胆』の内容を踏まえること。
- ② i P a dで調べた内容も含めること。
- ③ 班で情報共有・意見共有をして、作文にまとめること。

	A	B	C
Ⅳ 書く	古文の内容とi P a dの情報を 使い、道長がなぜ関白になれたか を根拠を示して後輩に分かりや すく説明することができる。	古文の内容とi P a dの情報 を使い、道長がなぜ関白になれ たかを説明することができる。	古文の内容を使い、道長がなぜ 関白になれたかを説明するこ とができる。

単元を通して身につけてほしいこと

歴史上の人物が一体どんな人物だったかを古文を読むことで身近に感じ、その人の性格・人柄が言動から読み取れることを学んでほしいと考えています。また、古文の内容にとどまらず、i P a dを使うことでより一層その人物像に広がりを持たせ、さらに、班のメンバーでコミュニケーションをとりながら情報を共有し、複数の意見を作文にまとめる力を身に付けてほしいと考えています。

実践の背景

- 古文の読解を中心にするのではなく、その人の行動からどのような性格が読み取れるのかを考えることによって、自分自身を理解する力を身に付けてほしいと考えました。
- 班活動を取り入れることで、古文に苦手意識のある生徒もクラスメートに助けを求めやすくし、コミュニケーションをとりやすい状況を作ること最後まで課題に取り組んでほしいと考えました。

授業改善のアプローチ

- 最初は『大鏡』がどのような作品かを学び、作者の視点で描かれている「道長像」であることを確認しました。また、古文の内容を読み取った後に、iPadを使うことで内容に広がりを持たせ、情報を共有しまとめる作業を班のメンバーで取り組むことができるようにしました。

授業を通しての生徒の変容

生徒は最初は古文の内容を使ってパフォーマンス課題に取り組もうとしていましたが、それだけでは説明内容が不十分であることに気づきました。その後、班活動ではどのような情報が必要なのかコミュニケーションを取りながら課題に取り組むことができました。中には、道長が実際には「関白」にはなっていなかったことに気づき、歴史的な事実を詳しく調べていた生徒もあり、自主的に活動ができました。

単元の構成

第1次（2時間）	第2次（4時間）	第3次（3時間）	第4次（2時間）
「雲林院の菩提講」 『大鏡』がどのような作品かを確認し、パフォーマンス課題を提示する。	「弓争ひ」 古文を読解し、内容の要約をする。道長と伊周の性格を比較し根拠を示して説明する。	「道長の豪胆」 内容を把握する。道長と道隆と道兼の性格を比較し根拠を示して説明する。	パフォーマンス課題 iPadを使って道長のことを調べる。古文を読んで分かったとともに班活動を行う。

単元ルーブリック

	2	1	0
I 関心・意欲・態度	本時の目標に対して、常に課題を考えながら取り組むことができた。	本時の目標を理解し取り組むことができた。	本時の目標を理解できず、取り組むことができなかった。
IV 読む	古文の内容を理解し、道長の性格を根拠をもとに読み取ることができた。	古文の内容を理解し、道長の性格を読み取ることができた。	古文の内容を理解できず、道長の性格を読み取ることができなかった。
V 知識・理解	古文単語の意味を正確に理解できた。	古文単語の意味をほぼ理解できた。	古文単語の意味を十分に理解できなかった。

学期の評価

- ① 定期考査による評価（50%）
- ② パフォーマンス課題に対する評価（20%）
- ③ OPPシートなどの提出物等に対する評価（30%）